

図書室月報

2021年(令和3年)11月5日

第702号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

時間がかかってもいい、 自分の答えは自分で見つけること —発達障害サバイバルを受講して—



前田 有美

『のび太・ジャイアン症候群』という本が話題になった数年後、思春期の私は生活上のミスや人間関係で困っていました。ミスを減らすため様々な試行錯誤をしました。感謝と謝罪は反射で言う癖をつける、口頭での指示を記憶に留めるためにメモを取る、忘れ物防止のため大量のリュックに必需品を常に入れるなど。物理面は改善しましたが、自己評価の安定には至りませんでした。

ここ十年は発達しようがい者向けの生活術が増えて拡散されています。それを調べる過程で借金玉さんのSNS投稿、インターネットの記事や著書を拝読するようになりました。ぜひ直接お話を伺いたいと思いいちオンライン受講しました。

「変な位置から生えた下顎骨を放置したところ三十九度の熱と血と膿を出した」という痛々しい近況を「恐ろしく忍耐が乏しく信じられないほど耐えるバカ」と講師自ら形容して講座が始まりました。精神の不調より先に身体の不調を疑おうという

教訓を軽妙に語る声を聴いて、画面越しに噴き出さずにはいられませんでした。

多々登場した生活術では自己理解と言語化の話題が特に刺さりました。自己理解と言語化はあらゆる場面に通用する課題解決の第一歩です。安易な自己規定に直結する「発達しようがい」の一語を取り払い細分化した言語での自己分析を行うことが肝要とのことでした。思考は形にしない限り整理はできず、思い出せなくなり分かつたふりほど怖いものではありません。

しかし、私は思考の整理に時間を要することと表現の拙さを言い訳にして頻繁にさぼってしまいます。代わりに自分の特徴や心境にあてはまる文章を見つけておく、何度も語を変えてネット検索をする癖がつかまりました。講座では「発達しようがい」は百人百様。一時間ネットで調べてもわからないことは大体わからないし論文にも書いていない」とバツサリ斬られてダメージを受けました。私の答えは私が出さなければなかつたので

す。私について綴られた文章など存在しないのですから。また、自己や出来事の分析と言語化は過度の自責を止めるにも効果的とのことでした。講座を機にネットから離れる時間を設けて思考の言語化にあてたいと思いました。

他にも、就寝前に失敗を反省して落ち込む「一人反省会」を止められないときには中原中也の詩『春日狂騒』を読んで本文を実践すること、タスクが後回し・中途半端になることへの対策として「達成できるまで『明日はやっていこう』と思う姿勢と行動をとり続ける」ことなどが語られました。耐えきれないほど辛いときは、ひとしきり泣いて自責を終えてから美味しいものを食べて寝て分析を始めればよい。笑いも交えた温かい語り、終始一貫して生を肯定するエールに励まされました。

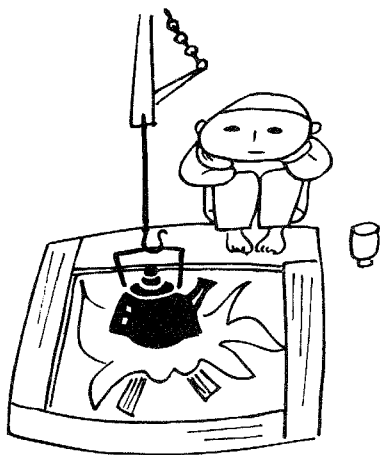
講座中に述べられた「決心の意味はなく、行動を改めることが重要」を実行すべく想いを言語化し寄稿しました。お陰様で今日は一歩前進できました。明日もやっつけていきます。

ブッククラブから

川端康成著

『山の音』に参加して

谷岡賢一



「山の音」が何を意味するかは不明だったが、読みだしてすぐに、主人公が62歳の初老の男性(尾形信吾)で、妻保子のいびきに悩まされる件で、わが身と重なり、作品に吸い込まれた。そして、「ふと信吾に山の音が聞こえた」「音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそわれた。死期を告知されたのではないかと寒気がした」の描写で、「山の音」が主人公の死への不安を象徴するものであることが分かると、70歳を過ぎて同じように「死」を思うことが増えてきた自分には、主人公の思いや感じ方に共感すること多く、どんどん読み進められた。

大家族ゆえの問題もあるが、私には人がいっぱい居る家族の雰囲気懐かしい。作品全編を通して描かれているものに、信吾と息子の嫁(菊子)との心の交流がある。息子(修一)が外に女性を作って妻を泣かせているが、それを知ってもどうすることもできないでいる信吾夫婦。信吾は息子の不始末を詫びるかのようには嫁に肩入れするが、それだけでなく、信吾には、忘れられない「美人の」女性(保子の姉)への思慕があり、「美人の」菊子にその姿を重ね、ほんのり甘い感情も抱いている。一方、菊子は夫に代わって自分を何くれと思いやってくれる舅に心の拠り所を求めており、嫁・舅という関係にしてはやや深すぎるやり取りが続く。

ところで、人間にとつての「死」とは何か?修一の不倫の相手やそこに同居する女性は、戦争未亡人で共に亡き夫への思い忘れがたく、修一との悲しいプレイから抜け出せないでいる。一方、修一身は戦地で銃弾が耳元をかすめていく経験をし、また、多くの死体を見てきたことで、生きることに対する健全な意思を持たないでいる。精神の退廃と麻痺が、妻が中絶することにもためらいのない行動となって表れる。信吾は、少年時代に憧れた保子の姉が結婚後、夭逝したことによって、「美の女神」に偶像化してしまっただけではないか。その結果、保子と結婚して30年以上経っても「美人の姉」に比してと、ことあるごとに妻や娘の不器量を嘆く。果てには、菊子が中絶し

た子どもこそが、保子の姉の生まれ変わりで、この世に生を与えられなかった美女ではなかったか」と、とんでもない妄想をする異常さを見せることになる。「死」がもたらしたものに対し、生きている各々が自らの生きづらさに耐えているのである。

読後、とても面白い作品だと思っただが、他の複数の参加女性から「川端康成は嫌い」「この作品は読みたくない」などの声があったことに驚かされ、自分が男目線であること、今の人たちとモノの見方に大きなギャップがあることを感じた。人の読後感を聞くことは、作品に対する味わい方が深まるだけでなく、自分自身を気づかせられる貴重な機会になると再認識。ブッククラブは面白い。

新着図書から

〔総記〕 わたしの、本のある日々 小林聡美(毎日新聞出版) 019	〔歴史〕 〈弱者〉の帝国 ジェイソン・C・シャーマン(中央公論新社) 230 二つの世界大戦への道 中井晶夫(えにし書房) 234 ブラック・ライヴズ・マター回想録 パトリース・カーンIIカラーズ(青土社) 289 高尾山ハイキング案内 (山と溪谷社) 291 不思議の国のラオス 森山明(彩流社) 292	〈社会科学〉 現代カナダを知るための60章 飯野正子総監修(明石書店) 302 主権者のいない国 白井聡(講談社) 304 権威主義 エリカ・フランツ(白水社) 313 コーカサスの紛争 富樫耕介(東洋書店新社) 316 憲法学者の思考法 木村草太(青土社) 320 再犯防止から社会参加へ 金澤真理編(日本評論社) 326 檻の中の裁判官 瀬木比呂志(KADOKAWA) 327 パンデミックは資本主義をどう変えるか ロベール・ボワイエ(藤原書店) 332 コロナ禍に立ち向かう働き方と法 和田肇編著(日本評論社) 366 災害女性学をつくる 浅野富美枝編著(生活思想社) 367 老後レス社会 朝日新聞特別取材班(祥伝社) 367 見えない妊娠クライシス 佐藤拓代編著(かもがわ出版) 367 ルポ婚難の時代 筋野茜(光文社) 367 ジェンダー分析で学ぶ女性史入門 総合女性史学会編(岩波書店) 367 処女の道程 酒井順子(新潮社) 367 コンセントの向こう側 中筋純(小学館) 369 生活不安定層のニーズと支援 西村幸満(勁草書房) 369	国境なき技師団スマトラ島から東北へ 濱田政則(早稲田大学出版部) 369 10年後の福島からあなたへ 武藤頼子(大月書店) 369 学校が「とまった」日 中原淳監修(東洋館出版社) 370 京都市の在日外国人児童生徒教育と多文化共生 磯田三津子(明石書店) 371 超えてみようよ!境界線 村山哲也(かもがわ出版) 372 世界の「常識」凶鑑 御手洗昭治編著(総合法令出版) 382 交差する辺野古 熊本博之(勁草書房) 395 〈自然科学〉 迷走生活の方法 福岡伸一(文藝春秋) 404 物理学者のすごい思考法 橋本幸士(集英社インターナショナル) 420 人類史マップ テルモ・ピエバニ(日経ナショナルリサーチオグラフィック社) 469 私の顔はどうしてこうなのか 溝口優司(山と溪谷社) 469 かぐわしき植物たちの秘密 田中修(山と溪谷社) 471 深夜薬局 福田智弘(小学館集英社プロダクション) 499 〈工業〉 「はやぶさ2」が拓く人類が宇宙資源を活用する日 川口淳一郎(ビジネス社) 538 〈産業〉 知られざる拓北農兵隊の記録 鶴澤希伊子編著(高文研) 611 〈芸術〉 ちひろ、らいてう、戦没画学生の命を受け継ぐ 小森陽一(かもがわ出版) 723 オオカミ県 多和田葉子(論創社) 726 それでも僕は歩き続ける 田中陽希(平凡社) 786 〈文学〉 みっちゃんの声 石牟礼道子(河出書房新社) 91 コンジュジ 木崎みつ子(集英社) 91 その扉をたたく音 瀬尾まいこ(集英社) 91
---	--	--	--

へ一節

リースル・クラーク、レベッカ・ロックフェラー著
『ギフトエコノミー』
「買わない暮らしの作り方」



さて、「買わない暮らし」とは何を意味するのでしょうか？平たく言えば、それは「ほしいものや必要なものを買う前に、ほかのあらゆる可能性を探ること」。そして、すこやかな地球の上で、ゆたかで中身あるたのしい人生を送ることです。これは私たちは「買わないプロジェクト」を通して実践に移してきました。それは、現代人のほとんどが依存している「市場経済」(「売買」に代わる、ローカルなギフトエコノミー(ゆずり合い)のネットワーク。人々が分け合い、買わずに人からもらい、捨てずに人にゆずるネットワークです。それはひとつの思考の転換でもあります。古いことわざ「ある人のごみは他人の宝」に示される真実を思い出すこと。かつて愛用していた、でも今は使わなくなったものを、屋根裏やガレージやごみ箱に追いやるのではなく、新たな家を与え、第2の命を吹き込む大切さを思い出すこと。

現代人の多くは満足を忘れていきます。「より多く」を求める欲望は、私たちの財布と地球環境の両方にとんでもない負担を強いています。地元の海岸でプラスチックを見つけたことは、私たちがふたりにとって、その事実確認となりました。もはや待たなし。とにかく、何でもいからアクションを起こして、みんなで買ひ物の習慣を見つめなおす機会を持ち、増加の一途を辿る地球上のプラスチック汚染を食い止めなければ、と痛切に感じました。

図書室のしごと

ろうの両親から生まれたぼくが

聴こえる世界と聴こえない世界を

行き来して考えた30のこと



お話 五十嵐 大(ライター、エッセイスト)

宮城県海辺の平凡な町で、耳の聴こえない両親から生まれた著者は、小学校3年生まで聴こえない親に何の疑問も持ちませんでした。しかし、ある日、母親の喋りを友人に笑われてから「普通でない家庭」とコンプレックスを抱え続けます。時に母親につらく当たり、大好きだけれど大嫌いの間で揺れ動く、葛藤や悩みを綴ります。

高校卒業後の上京で悩みから逃避しますが、祖父母の死、東日本大震災、父親の入院等で、再び家族と向き合うことになり「聴こえる人がひとりもない実家」のため、会社勤めをやめて、フリーランスの物書きに転職します。今は幼い頃のわだかまりはなく、「自分にはなにができるのか」を問い続け、母親との過去を振り返りながら、聴覚しようがいについて書くことが生きる意味となっています。

ほとんどが健常者の視線で構築される社会にあって、ろうの両親の子どもとして、自分自身の経験を通して、聴覚しようがいの出来事を「とにかく知ってもらいたい」と話しています。

〈五十嵐さんの本〉表題作(幻冬舎)、『しくじり家族』(CCCメディアハウス)

とき 11月21日(日) 昼2時〜4時

ところ 公民館 3階講座室

定員 会場受講15名・オンライン受講30名※いずれも申込先着順

申込 11月9日(火)朝9時〜11月18日(木)夕5時

会場受講・公民館 ☎(572)5141

オンライン受講 : sec_kominkan@city.kunitachi.lg.jp

受講申し込み項目
【件名】講座名【本文】①氏名 ②ふりがな ③住所 ④電話番号
※参加方法の詳細は、前日までにメールいたします。
※当日、参加者側の環境による接続や音声の不具合についての問合せには対応できませんので、ご了承ください。

〈私の本棚から 第2回〉

シヨーン・タン著

『アライバル』



中井 あつし

この本は絵本です。とはいっても、本のカバーは祖父母の家で見つけた古い家族アルバムのような装幀で、子ども向けのカラフルな絵本とは全く印象が異なります。

二十世紀の初頭でしょうか、巨大な竜が跋扈する旧大陸に妻と娘を残して、男が新大陸に船で移住します。

「アライバル」というタイトルのように、新大陸に着いた男はアパートを探し、仕事を見つけて暮らし始めますが、そこにも尾の長い不思議な生き物(無害のようです)が至る所に生息していて、さらに時には『進撃の巨人』を彷彿とさせるような巨人族に襲撃されます。

男はなんとか新大陸に生活の基盤を築きますが、やがて起きた戦争で悲惨な状況に陥ります。

このように苦難を何度も乗り越えながら、男は妻と娘を新大陸に呼び寄せることを決意します。

ざっと物語のあらすじを書きましたが、この本はグラフィックノベルという文字のない絵本です。私はこのようにストーリーを考えましたが、読む人によってはストーリーが変わり、別の場面に注目するかもしれません。まるでサイレント映画を見ているような感覚です。

タイタニック号のような巨大な船、自由の女神風な化け物の巨大像、ボッチャのようなゲーム、ジャワ文字風な読めない貼り紙、そして身の回りに常にいる尻尾の長い奇妙な生物はペットなのか、時には食料になったりもするようです。

最終ページに「作者あとがき」という文章がありますが、その隅にカラフルなクレヨン画が描かれています。落書きのような絵ですが、示唆することは感動的ですので、そこもお見逃しなく。

日本の劇画にみられるような小さなカットを連続させて、ストーリー展開を想像させます。登場人物の表情や目力が表現豊かです。見開きページにびっしりと描きこまれたファンタジー的な世界。

これらを見ながら自由にストーリーを考えていく読書は、秋の夜長にはうってつけだと思います。(河出書房新社)

くにたちブッククラブ

一人生、野を越え山こえてー
向田邦子『思い出トランプ』
(新潮文庫)

おだいら
講師 小平麻衣子
(慶応義塾大学・日本近代文学)
とき 11月11日(木)
夜7時半〜9時半
ところ 公民館 地下ホール
申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は12月9日(木)
中島らも『今夜すべてのバーで』
(講談社文庫)です。

